



ISSN 0385-0838

第 137号

発行所

亜細亜大学アジア研究所
東京都武蔵野市境5-24-10

電話 0422 (54) 3111

郵便番号 180-8629

注目すべき延辺朝鮮族自治州

「延辺特集」に際し

野副伸一

初めに

『アジア研究所所報』は本号と次号で「延辺特集」を掲載する。亜細亜大学アジア研究所延辺訪問団は昨年(二〇〇九年)八月十六日(日)から二十三日(日)の八日間、中国吉林省の延辺朝鮮族自治州を訪ねた。

この延辺訪問は、亜細亜大学アジア研究所の研究プロジェクト「延辺朝鮮族自治州の社会・経済の変容と適応」(主査 西澤正樹教授)の研究活動の一環として推進されたものである。参加者は総勢十一人。プロジェクト関係者以外

にも金融、マスコミ等、色々な分野の専門家が加わり、愉快で刺激的な旅行となった。延辺訪問が初めてという参加者も多く、現地での多くのことを見聞きし、日々議論を深めることで、参加者はさまざま感想を持ったと思われる。それらを自由に書き留めてもらい、日本で余り知られていない延辺の現状を紹介しようというのが本「延辺特集」の狙いでもある。

今回の延辺訪問の主たる目的は、大きく言って二つあった。一つはアジア研究所と延辺大学日本学研究所との学術交流協定の締結であり、もう一つは延吉・琿春(こんしゅん)の投資誘

目次

注目すべき延辺朝鮮族自治州	野副伸一	(1)
「辺境都市」の魅力	東 善明	(4)
変わる延辺、変わらぬ日本	鈴置 高史	(6)
北東アジア地域の共同発展の可能性を体感する	真田 幸光	(8)
延辺朝鮮族自治州の投資先としての魅力度	高木 誠司	(10)
延辺自治州雑記	須賀 努	(12)
朝鮮語と日本語の比較について	李 春蘭	(14)
『アジアの窓』		
東アジア共同体と米國	石川 幸一	(16)
アジア研究所だより		(16)

致状況と進出企業の現状把握である。

第一の延辺大学日本学研究所(李東哲所長)との学術交流協定の締結(写真参照)であるが、アジア研究所が海外の研究所と学術交流協定を締結するのは今回が二回目である。一回目は一昨年五月上海の同済大学アジア太平洋研究センターとの提携で、同済大学側からの提案にもとづくものであった。今回の延辺大学日本学研究所との提携は亜細亜大学側から提案したもので、延辺大学側の積極的呼応と相俟って短期間に話がまとまり、延辺での調印となった。

延辺大学は中華人民共和国が創建された年である一九四九年に設立され、そのため昨年

ちようど創立六〇周年を迎えた。少数民族である朝鮮族の高等教育のため設立され、延辺朝鮮族自治州の知的センターとしての役割を担ってきた。現在在校生二万人余を擁する総合大学である。日本学研究所は九八年に設立され、歴史はそれほど古くはない。しかしその背景には昨年三〇周年を迎えた日本語科がある。所長の李東哲教授は日本滞在十八年の経歴を持つ日本語の専門家、筆者とは以前からの知り合いでもある。アジア研究所は日本学研究所とは資料交換に止まらず、今後学術交流等、間口を広げて行きたいと考えている。今回『所報』に「延辺特集」を組んだのも、その第一弾である。

第二の延吉・琿春の投資誘致状況と進出企業の現状把握であるが、このため多彩なプログラムが用意されていた。具体的には、延辺自治州政府商務局との懇談、琿春辺境経済合作区管理委員会との懇談、工場見学（延吉で七社、琿春で五社）、インフラ見学（ダム建設現場と日本工業団地造成地）等が挙げられる。これらのプログラムを通じ、延辺経済の現状、対外貿易の状況、外国人投資の現状等を把握することができた。州政府が外国人投資誘致に極めて積極的であることが印象的であった。

なお琿春では、鳥嶺税関（対ロシア）や圈河税関（対北朝鮮）を訪ね、琿春の東端にある防川では左右に広がるロシアと北朝鮮、両国にかかる橋、さらにその先にある日本海を眺望した。また防川からの帰途、張鼓峰事件展示館に立ち寄り、展示物を見ると共に展示館の裏手に

ある張鼓峰を眺めた。

延辺とはどういうところか

ところで、延辺と言っても今の学生は誰も知らないであろう。年配の日本人なら、「閩島」と言えば或いは知っておられる方がいるかも知れない。いずれにしても、延辺は今の日本人にとっては全く馴染みのないところと言って差し支えない。しかし、延辺は一旦知れば興味が尽きない場所でもあり、注目すべき場所でもある。延辺について簡単に紹介しておきたい。

まずどこにあるかと言うと、中国東北三省の一つである吉林省の東側にある。延辺の正式名称は、延辺朝鮮族自治州である。名称から窺えるように、朝鮮族（中国国籍を持つ韓国人）が多く居住している。全人口に占める朝鮮族の比率はかつて六二・〇％（一九五二年）と高かったが、年々低下し、現在では三七・〇％（二〇〇四年末）に低下している。

延辺の位置であるが、北朝鮮のさらに北に位置し、北朝鮮とは豆満江（中国名 図們江）を挟み五二・二kmの国境線で接している。今回訪問した延吉と琿春の緯度は北緯四三度に当たり、札幌や釧路とほぼ同じ位置にある。延辺の面積は四・三万平方kmで、九州よりちょっと大きい。人口は二〇〇四年末で二一七・七万人（うち朝鮮族は八十二万人）である。

延辺は白頭山（中国名 長白山）観光の玄関口として昔から知られ、山が深い土地柄のため、天然資源も豊かである。「東北三宝」と呼ば

れる朝鮮人蔘、鹿茸、貂皮を始め、きのこ類も有名である。また鉄鉱石、有煙炭、石油等、鉱物資源も豊かである。

注目すべき延辺

そのような延辺を何故注目する必要があるのだろうか。筆者なりにその根拠を挙げれば、以下の通りである。

第一に、延辺が「第三の코리아」であるからだ。前述のように、延辺には八十二万人もの朝鮮族が住んでいる。現在中国には朝鮮族が二〇〇万人以上住んでいるが、その大半は東北三省に住んでおり、中でも吉林省が一〇〇万人と最も多く、その大半が延辺に住んでいる。朝鮮族の人口規模、密度、さらに朝鮮語が公用語化されている点等から見て、延辺は「第三の코리아」と呼んで差し支えないであろう。日本としては、延辺は無視できない場所なのである。

第二に、その延辺に住む朝鮮族が日本に極めて友好的であるという点である。文化大革命の折朝鮮族は漢族から迫害され、多くの朝鮮族が北朝鮮へ逃げたとも言われている。また朝鮮族と韓国人の関係も必ずしも友好的とばかりは言えず、かなり微妙なものがある。そんな朝鮮族にとって直接的な利害関係の薄い日本人は気安く、親近感を持ちやすいようである。それだけに日本への期待も強いと思われる。

第三に、朝鮮族の人的資源の高さである。朝鮮族が教育熱心であることはよく知られている。中国では朝鮮族の大学進学率が一番高く



(西澤正樹教授 提供)

なっている。さらに彼らの強みは語学力である。中国語だけでなく、朝鮮語、さらに日本語ができる学生が多い。二十一世紀に入って朝鮮族の若者の間で日本語熱が急速に冷めたが、就職に有利ということでまた日本語への関心は強まっているようである。対中ビジネスやITビジネスで人材に事欠く日本にとって、日本語ができ、漢字が分かり、日本人の感性に近い朝鮮族は即戦力にもなり得る。現に沢山の朝鮮族IT技術者が日本で活躍しているのである。

第四に、延辺が日本海ルートを通じた物流の

前進基地になっている点である。今後北朝鮮の政治情勢が変わり、北朝鮮が改革・開放路線に大きく展開していく場合、対北朝鮮経済交流の窓口としての延辺の役割は極めて大きくなっていく。特に羅津(北朝鮮)やトロイツァ(ロシア)を通じての日本海航路が軌道に乗れば、物流コストや所要時間が大幅に短縮され、吉林省や黒龍江省、さらに新瀋を始めたとする日本海側諸島の経済を活性化させる可能性が強い。すでに二〇〇〇年四月から琿春 東草航路(トロイツァ経由)が週三便(冬季は週二便)就航しており、韓国企業の対延辺投資の原動力となっている。なお昨年七月からは北東アジアフェリー(東草 新瀋 トロイツァ 琿春航路)も週一便就航し始めており、今年からは逆方向の航路も週一便就航の予定である。

最後に、延辺が脱北者の前線になっている点である。前述のように延辺は豆満江を挟み北朝鮮と長い国境線で接している。そのため脱北者や両国を許可無く往来する人間が多い。そのため前述の第四点と合わせ、延辺は北朝鮮の内部事情を把握するには重要な場所となっている。延辺大学との学術交流の機会を通じて、朝鮮半島の研究を深めていく機会を作りたいと思う。

終わりに

今回の一週間にわたる延辺滞在は上述した延辺の重要性、面白さを改めて再認識させてくれた。特に筆者にとって特に印象的であった点を最後に紹介しておきたい。それは高級婦人服

メーカー小島衣料への訪問であった。我々は小島衣料を八月二〇日に訪問したが、その日に新潟発トロイツァ経由で琿春に初めて荷物が到着することのことであった。「今回初めて」という話は筆者にとって実は驚きであった。とうに動いていると思っていたからである。以前小島衣料の社長から日本海航路にかける思いを直接聞いたことがある。実際日本海航路での物資の到着時間は三〇時間と短い。それを神戸発大連、長春経由で琿春に持つてくると一週間かかるといふ。しかし輸送コストでは逆で、大連経由を一〇〇とするとトロイツァ経由だと仕向け地により一五〇から二〇〇もコストがかかるという。日本国内の陸上交通費等が高いためである。

小島衣料の日本海航路利用の遅れについては理由を確認しなかったが、輸送コストが安くならないことや景気の悪化で注文が減少していること等が作用しているものと思われる。昨年まで一〇〇〇人いた従業員が五〇〇人になっていたことも気がかりな点である。

とは言え、前述の琿春 東草航路が昨年四月から料金を大幅に値下げしており、それに北東アジアフェリーがドッキングし、新潟から東草行きが運行すれば輸送コストは多少安くなるのではないか。また日本国内の陸上交通費を安くする手立て、例えば鳩山政権による高速道路料金やガソリン税の値下げの動きは、日本海航路活性化への大きな追い風になると見られる。(のぞしんいち・アジア研究所所長・教授)

「辺境都市」の魅力

グローバルとローカルの間で

東 善 明

中国では二〇一〇年開催予定の上海万博が話題である。私は万博といえば、自分の生まれた

る。

一体化する中国

一九七〇年開催の大阪万博を思い出す。小学生の頃、未来都市のようなパビリオン群や世界各国の民族文化の虜となった私は、飽きもせず両親が現地で購入した記念写真集を眺めた。それは遙かなる未来や遠方への時間的・空間的な超越体験だった。実際に、当時の「世界」は広く遠かったように思う。外国どころか、故郷から遠く離れた北海道や沖縄にもエキゾチズムが漂っていた。

それから約四〇年、未来都市へはまだ行けないが、時間と旅費さえあれば空間的にはどこにでも行ける時代となった。交通機関の発達や流通システムの改善、貿易や投資の自由化、個人所得の向上を通じて、我々は国内外を問わず遠く離れた場所へ就学し就職し旅行できるようになり、工場で作られるモノであれば何でも国境を越えて入手できるようになった。経済発展は「世界」を縮小させたのである。しかし同時に、都市景観やライフスタイルは国内で、あるいは海外との関係において、均質化しつつあ

経済発展の道をひた走る中国では、全体として、今まさにこうした「世界」の縮小、すなわち「グローバル化」や「都市の均質化」という

波と、「ローカル性の希薄化」が進行している。出稼ぎ者数は年々増加し、旅行ブームが訪れて久しく、標準語がますます浸透し、全国横断的なTVオーディション番組が人気を博し、地方料理の洒落たレストラン網が全国に広がり、大都市には国際ブランド品が並び、小都市でさえ地球規模で拡大するファストフード店舗が増殖するなど中国全土が一体化しつつある。

こうした中、大変幸運なことに、野副先生を団長とする、中国東北部の吉林省・延辺朝鮮族自治州（以下「延辺州」）への訪問団に参加させて頂く機会があった。延辺州は北朝鮮やロシアとの国境沿いにある、紛れもない辺境地域である。果たして、こういう辺境地域にも「グローバル化」や「都市の均質化」という現代の大波は押し寄せているのだろうか？そして、そ

の裏返しとも言える「ローカル性の希薄化」はどうか？以下ではこうした点につき、延辺州での滞在を通じて私の受けた印象等をご紹介します。

延辺州に関して私がまず驚いたのは、北京から直行便が飛んでいるという事実だった。機内で二時間眠ると到着する場所に「辺境」の言葉は似合わない。次に、州政府のある延吉市やロシア国境貿易が盛んな琿春市を訪問し、いずれも日本の地方都市的な景観を呈するまでに発展していることに驚いた。

北京や上海などのメガシティとは比べるべくもないが、それでもビルが立ち並び、地元資本のデパートに人が集まり、国際ブランド商品が売られているという光景は中国の他都市と同じであり、この辺境地域にも「グローバル化」と「都市の均質化」という大波が押し寄せてきていることを実感した。

「都市の均質化」の背景

その背景にあるもの言うまでもなく経済発展だ。二〇〇八年の延辺州GDPは前年比+18%と中国平均を上回る勢いで成長している。固定資産投資は同+42%、小売売上は同+27%と、道路や建物などが続々と作られ、人々の消費意欲の高いことが分かる。こうした目覚ましい経済発展を実現してきたものは、次の二つの異なる発展モデルである。

一つ目は、外需モデルでも言うべき方式だ。中国は一九七八年からの改革開放で海外企

業等の積極的な誘致を始めたが、これは中国の安い土地と労働力に海外の資本と技術を使って作った製品を、購買力の高い先進国に輸出するモデルである。この結果八〇～九〇年代にかけて珠江デルタや長江デルタなどの沿海部が大いに発展した。外需モデルは今でも、今度は沿海部から内陸部に分散する形で続いている。

延辺州でも「琿春辺境経済合作区」等の開発区が設けられており、日本や韓国向けの衣料、木材加工品などが製造されていた。また延辺州は、北朝鮮・ロシアとの国境である図們江周辺を日本や欧州市場も見据えて開発するという多国間プロジェクトの拠点でもあり、対外貿易を柱とする将来の潜在成長力は大きい。これを見据えてか、主に日系企業を専門に誘致する開発区が新たに建設されていたのも印象的だった。

二つ目は内需モデルである。外需モデルは地域間格差や貿易黒字拡大などの不均衡を生んでいることもあり、中国政府はよりバランスのとれた経済成長のため、「沿海部・輸出」から「内陸部・国内販売」に重点を移してきている。これは中国に資本や技術が蓄積され始め、自国民の所得水準が向上してきたことの現れでもあるが、こうした変化は昨年の金融危機以降、外需モデルで買い手の役割を担う先進国の購買力が弱まったため更に加速している。

延辺州は西部大開発や東北振興といった従来からの政策支援もあり、空港や道路が整備され、高速鉄道建設も予定されているなど恵まれた環境にある。インフラ整備は企業物流にもブ

ラスであり、開発区には、実際にナッツ類や飲料といった食品加工、医療機器、農機具製造など国内販売を主とする製造業も少なくないように見受けられた。

延辺独自の「ローカル性」

中国の他の地域と同じように、外需モデルと内需モデルの両輪で経済発展を成し遂げ、「グローバル化」や「都市の均質化」に直面している延辺州だが、興味深いことに、朝鮮族の自治エリアであるためか、独自の「ローカル性」を希薄化させずに保持・強化していることには感銘を受けた。街にはハングル文字が溢れ、耳には朝鮮語が飛び込んでくる。朝鮮料理レストランや韓国製品の小売店も多く、中国であつて中国でないようなエキゾチズムがある。

重要なことは、こうした「ローカル性」が、消費対象として再発見された記号性の強い「商品価値」（例えば「地域限定グッズ」）ではなく、実際に当地の経済発展ダイナミズムに寄与する「生きたシステム」であることだ。

例えば、州住民二二〇万人のうち約八〇万人が朝鮮族だが、彼らは韓国への出稼ぎを通じて当地の消費を押し上げ、韓国企業の誘致などで力を発揮している。消費の強さやポーター経済といった類似性からか、当地では「南の深圳、北の延吉」という表現も耳にした。なるほど局所的な経済発展が全国から人を引き付けている点も似ている。中国の内陸部発展の原動力の一

つは「都市化」に他ならないが、二〇〇八年末の延辺州の都市化率（都市人口の比率）は66%と、同年の全国平均46%を大きく上回っている。

当地の「ローカル性」が、少数民族自治という制度によって保護されていることは重要だ。

深圳は全国各地からの移民が作った新興都市で、広東省にありながら広東語ではなく標準語が使われているが、朝鮮族自治州である延辺州が朝鮮語を忘れることはない。延辺州の条例は、政府機関は朝鮮語と中国語の双方を用いねばならず、特に朝鮮語を主たる言語とすること、人材活用や高等教育で朝鮮族を優遇せねばならないこと、朝鮮族の伝統文化を継承し発揚すること、延辺州政府の州長は朝鮮族でなければならないことなどを定めている。

大阪万博の「人類の進歩と調和」という壮大なスローガンは、その後のグローバル社会の到来を予感していたようにも感じられるが、上海万博のスローガンは「より良い都市、より良い生活」である。グローバル化が進化した現代において、改めて都市レベルでの多様性を見つめ直す響きがある。

延辺州は、上海万博で独自の出展申請も行っている。北東アジアの明珠」とも形容されるこのユニークな「辺境都市」が、その魅力の世界に強く発信できることを願っている。

（あずまよしあき・日本銀行北京事務所副所長）

変わる延辺、変わらぬ日本

鈴置 高史

十一年ぶりに訪問した延辺は恐ろしく発展していた。しかし、日本との経済的な関係は遠いままだ。日本と延辺の人々は「相性がいい」とされるのに。

急速に整備されたインフラ

一九九八年、ある民間の調査団に加わって延辺を訪れた時、日本からの団員は一樣に驚いた。広東省などと比べインフラが未整備で、外資がほとんど進出していないからだっ

た。外資企業の進出数で言えば、未だ延辺は広東省に遠く及ばない。しかし、鉄道や道路の整備は急速に進み、中国の「中央」との距離は急速に近くなった。二〇〇九年夏に泊まった延吉のホテルは北京などからの観光客でこった返していた。土曜日夜のレストランは多くが満員で、順番待ちを余儀なくされた。十一年前の延吉は恐ろしく静かな街で、日本人は「改革開放に沸く中国でまだ、こんな街が残っていたとは」と言い合ったものだ。当時、この地域の幹部の人々は「旧ソ連との国境沿いのため、国防上の理由から交通網の整備が遅れた」と説明。日本からの参加者

の間では「日本政府は対中援助の際に、延辺と中央の道路整備などに向け『箇所付け』をすべきだ」との議論も起きた。

もっとも、日本政府の援助はなくとも、中国政府が延辺開発に本腰を入れ始め、二〇〇八年には長春から琿春までの高速道路が開通した。延辺朝鮮族自治州内の道路網も急速に整備された。中国の観光客が街にあふれるようになったのは、この整備されたインフラと、豊かな自然、そして中国の消費水準の向上からだろう。

延辺は広東省を追うのか

では、遅ればせながら整備されたインフラをテコに、延辺は広東省など「先発地域」を追うのか、あるいは追うべきなのだろうか。

「安い人件費を武器に組み立て工場を世界から呼ぶ」という地域発展モデルは広東省、ひいては中国で限界に達している。今回の世界同時不況以前の二〇〇六年ごろから、人件費の上昇を嫌った外資の流出現象が広東省では起きていた。

また、広東省の強みでもあった電機という特定産業の集中立地による成長は脆弱性も抱

えていることが明らかとなった。「組み立て産業は部品集積の豊かさを目指し工場進出する。次には膨張した組み立て産業を目指し部品産業がやってくる」という雪だるま式発展は、伸びる際には巨大な威力を発揮する。しかし、それは特定産業に頼る経済構造を生む。広東省の場合、繊維・雑貨、電機、自動車と徐々に主力産業の軸足を移すという巧妙な戦略をとってきたため、今回の大不況でも比較的打撃が少なかった。もし、内需向けの自動車産業への転換が少しでも遅れていたら、より大きな問題を抱えたことだろう。

延辺を含め中国の人件費は上がっていくであろうし、そもそも電機など組み立て型工場



小島衣料の琿春の現法工場。日本向けに女性用高級礼服を製造する



環春で計画中の工業団地予定地。見渡す限り草原が続く

食べ、遺跡
土地へ行
き、名物を
は「有名な
人々の観光
中国の
ないか。
なるのでは
ないか。
ことと「正し
いと「正し
い選択」と
なるのでは
ないか。
中国の
人々の観光
は「有名な
土地へ行
き、名物を
食べ、遺跡

が中核となる産業は世界的な供給過剰に陥っている。中国に限らず、後発国が人手を使う産業に一齐に注力してきたからだ。

延辺の地方政府は食品加工、医療器械、医薬、機械、建築材料、アパレル、印刷、情報サービスなど多様な産業を育てる方針だ。これは後発地域としてのやむを得ない結果的選択なのかもしれない。しかし、安い人件費だけに頼らず、バランスのとれた産業構造を目指したとして将来「正しい選択」と評価される可能性が大きい。

「中国の北海道」に？

また、延辺の地方政府が観光産業にも力を入れようとしているのも興味深い。清涼な自然が広がる大地に薄い人口密度という、観光には有利な条件を考慮してのことだろう。ただこれも、中国が豊かになると同時に観光

の前で写真を撮る」という物見遊山の観光が主だ。しかし、今後、急速に「何も無い自然の中でゆっくり過ごす」という滞在型が伸びると思われる。

現に、日本を訪れる中国人も少し前までは「秋葉原で電気製品を買い、翌日箱根に行つて温泉に入って、富士山を見て帰る」パターンだったが、「北海道にゆっくり滞在したい」という人が出始めた。また、日本の東北には台湾人相手に「雪嵐を見るツアー」を企画して成功した地域もある。雪嵐は観光にとってマイナスと考えられていたが、南国の人々にとっては得がたい体験であることに気がついたのだ。

延辺の人々は時に「何も無いところ」と故郷を評する。しかし、それが予想外の武器になって広東省や台湾から人々を呼び込み、「中国の北海道」を自称する日が来るかもしれない。

延辺と日本をつなぐ人々

では、日本と延辺の関係はどうなるのだろうか。小島衣料（岐阜市）や正栄食品など、延辺の潜在力を見抜いきち早く進出した日本企業もある。だが、韓国企業と比べその数は極めて少ない。延辺と日本の間の物流はロシアや北朝鮮を通過せねばならぬという不便さがあるからだが、「ますます内向きになる日本」という理由も大きいだろう。観光面でも日本との直行便がないこともあって延辺の美しい自然を愛でる日本人は多くない。

韓国企業にとっても物流の不便さは日本企業と同条件だ。ただ、韓国企業の進出は韓国語と中国語を話す朝鮮族の存在が原動力となっている。

延辺と日本の経済交流拡大には、いまは決して太くはないパイプを上手に維持しておき、両者の交通の壁となつて北朝鮮が変化した際に一気に関係を深める、という作戦が現実的なのかもしれない。

希望は延辺から日本に働きに行く人が増えていることだ。延辺の人々も韓国交正常化後は「言葉が同じ韓国へ行く」傾向が顕著だった。しかし、「言葉は異なるが、似ていて学びやすい日本へ」という動きも定着した。

彼らの中で資本と、製造業やサービス産業のノウハウを日本で蓄積し、延辺で事業を起こす人々が出てくる可能性が高い。それは、広東省型の工場とは異なり小さな工場やサービス業に留まるかもしれないが、安い人件費に頼らない多様な産業構造を生む契機となる。日本に住むある延辺出身者は「私自身、お力ネが溜まればそうしたい。これからそんな人が増えるだろう」と語っている。

日本の中でも「中国人のおおらかさと、韓国人の人懐っこさを兼ね備える」と延辺の人々に好意を持つ人が増えている。物流面での今すぐの改善が困難なら、まずは人の流れを太くする努力が要るのだろう。

（すずおきたかぶみ・嘱託研究員（日本経済新聞社編集委員））

北東アジア地域の共同発展の可能性を体感する

真田 幸光

ものづくり企業が生産最適地を考える場合、自国内のみならず、世界各地を検討対象として、何処が真に最適地なのかを選定していくものと思う。

基本的には、「絶対評価」ではなく「相対評価」によって最適地を選定していくものであり、リスクの極小化と利益の極大化を目指した様々な検討がなされる。こうした検討過程を経て、企業は「真の生産最適地は何処か？」を具体的に検討していくことになる。

世界に目を向けた生産最適地の選定と延辺

国際化の進展と開発途上国の発展の中で、中国やインド、ベトナムや東欧などの国々の経済発展が注目されている。もちろん、その経済発展が未成熟であり、経済規模もまだ大きく育ちきっていない国もあり、世界経済の変動の余波を大きく受け易く、特に最近の米国発・金融不安の拡大を背景として、これら各国経済も悪影響を受けていることは否めない。一方で、これらの国々の経済発展の潜在性は依然として高く評価されている。

世界の多くのものづくり企業は現在、そうした潜在性の高い国々を対象として、「生産最適地」を求めるFeasibility Studyを続けている。今回、訪問した延辺朝鮮族自治州も、十分に生産最適地の候補に挙げられると感じた。

生産最適地の選定については、当該企業の業種、生産する製品の種類、経営規模・体力といった前提条件の違いがあることから、一概に、何処が生産最適地として良いといった結論を導くことは出来ない。当該企業が、ひと、もの、金、情報の「ビジネスの四要素」の視点から、更には調達、開発、生産、マーケティングや販売、物流、サービスといった「バリューチェーン」の視点から地域を相对比较し、総合点の高い地域を生産最適地として選定していくことが最も現実的で確実な選定方法であると考ええる。

「延辺の生産最適地としての投資環境」を「人、もの、金、情報」の視点から評価するとすれば次のようである。

【ひと】当地域の人の素養の高さが認められ意外に協調性がある。地の中国の地域との相对比较では人材管理はし易い。

【もの】現地調達面から見た「もの」の調達に

は課題があるが、日本からの部品、原材料調達には大きな課題はない。

【金】金融システムが脆弱であること、人民元が未だに不安定な貨幣であることなどから、やはり不安は大きい。人民元の相場調達の自由さの度合いが拡大しており、今後の可能性は大いに期待できる。地元の金融システムも一応稼働している。

【情報】統計データに限界がある。一方、水面下での情報は意外に多く、こうした情報戦に勝てる体制が取れると中国ビジネスでの成功の可能性は大いに高まる。よって、パートナーや従業員の情報ネットワークを上手に利用していは面白いビジネス展開も出来よう。

延辺は、課題はあるが、「生産最適地」として潜在性は高いと考えられ、国際的な活動を展開するものづくり企業が高い関心を持ち続けてよい地域であろう。

小島衣料（渾春）服装有限公司の延辺ビジネス展開

当社は岐阜県に本社を置き上海、黄石などにも拠点を有する小島衣料の100%子会社である。〇六年に設立、資本金二、五〇〇千ドル、総投資額約五〇〇百万円、女性用高級服を月に五〇千着を生産する衣料メーカーである。OEM生産を基礎としており、輸出加工区のリットを生かし、原材料も製品も全量対日輸入、対日輸出を行っている。

従業員数は約五〇〇人、約99%が漢族であり、語学の才があると言われている朝鮮族は中

問部門に僅かにいるだけである。正社員ワーカーの平均賃金は約一、二〇〇人民元/月で、基本的には従業員一人一人の能力による出来高払い・歩合制となっている。定着率は約95%、当地出身者の比率は約95%となっている。

当社が渾春市を生産拠点として選択、決定した背景は、中国の発展の可能性を前提として、沿岸近くにあり人の採用がし易いところがかつ人件費が安いところという観点から選定、決定した。原材料の輸入、製品の輸出は現状、長春・大連經由日本であり約一週間かかるが、渾春・ザルビノ・新潟ルートが安定すれば三日で輸出入が可能となる。コスト的には、長春・大連ルートの1.5、2.0倍と高いが、今後の低運賃価格化が期待される。

当社の特徴は「目で見える管理、現場チェック」であり、品質安定のために様々な工夫がされている。生産ラインは、日本から原材料を輸入、数量、品質検査を終えてから、生産ラインに原材料が投入され、生産ラインには常に本社コストで五、七人の日本人スタッフが常駐している。日本人スタッフは月一回帰国し、日本のブームや消費者の嗜好などをチェックし、再び生産ラインに戻る仕組みで動いている。生産設備は、中国産ジュキヤブラザーの最新鋭機械である。生産ラインはCAD化が推進され、また超高級品を生産するイタリア生産ラインが設けられるなどの特徴を持つ。

輸出の際はハング・ラック・コンテナ（HL C）にセットされ「店頭でそのまま顧客に見せることができるまで生産コストの安い中国本土でできる限りの生産処理をする。」

ことをモットーとしている。特に、最終工程で使われる蒸気による最終型づくりは重要で、良質の蒸気を作り、仕上げをしていくことには相応の気配りをしている。更に、本社コストで、渾春工場内に日本本社直轄の検査部署を置き、毎日、全製品の検品を行っている。特に針の残りが無いよう、三回もの徹底チェックがなされる生産管理は注目される。

北東アジア開発と延辺

最後に北東アジアと延辺の中長期的な可能性について論じてみたい。筆者は以前より、「シベリア、モンゴル、中国本土、南北朝鮮に日本を加えた北東アジア開発の必要性」を強く認識しており、「地域の共同開発、場合によっては国際的な開発の必要性が高い。」とも考えている。

そして地域の共同開発については「食糧生産基地の建設」「エネルギー生産、輸送基地の建設」「高品質の水資源開発」を軸とし、これらを支える「物流網、電力網を中心とする基礎インフラ整備」を進め、実体経済、実際のビジネスを通じた「共同経済圏、ひいては、将来的には共通経済圏にまで拡大」していくことを念頭に置いた鳥瞰図的、複眼的視点から見た共同開発計画の樹立が必要ではないかと強く考えている。

いずれも、優先順位は高いのであるが、更に高い優先順位を置くべきではないかと考えているのは「東北アジアに於ける物流網の整備」「エネルギー資源開発とパイプライン設置の加速化」である。この二点については、中国や日本の強い期待、ロシアや中国の強い希望と開設

意志があり、北朝鮮問題という、やや政治的に解決しにくい問題は残存しようが、当事者間の意向、利害関係を上手に調整していけば、場合によっては、「一気に突破口が開ける」可能性がある。

そして、物流とエネルギー問題を合わせ技とし、日中が手を組んでロシアに要請をしていけば、「ロシア側のより強い同意と協力が求められる」、エネルギー開発をしつつ物流網の整備も図れる」という一挙両得の可能性もてくる。

更に、こうしたプロジェクトに、この地域のエネルギー開発に対して、昨今、高い関心を寄せる「インド」も加えて、大アジア経済繁栄システムを構築していけば、「一人取り残されるであろう北朝鮮の譲歩を引き出すこともできる」であろうし、また「食糧の共同開発や高品質の水資源開発」へと発展していく可能性は高まるのではないかと考える。

高い技術と資金力、特に効果的なエネルギー利用に関するノウハウを持つ日本のエネルギー開発技術能力と、実際のプロジェクト・サイトを数多く抱え、資金力が強まり消費意欲が絶大に増していくであろう中国にとって、北東アジアの共同開発は、Win Winの関係となり得るものである。

ここで大いに日中が協力をして、ロシアやその他の関係国にも当然に大きな利益をもたらす平和的ビジネス開発を、政治をやや横に置きながら推進できれば、関係各国の一般庶民は皆、大いに利益を享受できるものと考ええる。

（さなだゆきみつ・愛知淑徳大学ビジネス学部教授）

延辺朝鮮族自治州の投資先としての魅力度

高木 誠 司

はじめに

筆者は、二〇〇七年七月に日本機械輸出組合（日機輸）香港事務所に赴任し、香港にベースを置きながら、二年強にわたり、中国のマクロ経済状況の調査、そして、日本企業を中心とした中国各地（及び周辺国）の投資環境の調査を行ってきた。今回、初めて、延辺朝鮮族自治州を訪問する機会を得たところ、筆者の中国の投資環境に関する全体的な印象を書いた上で、そういう人間から見て、延辺がどう見えるかについて、その後に記述したいと思う。

日本企業による中国投資全般の印象

筆者は、香港駐在を開始して以降、賃金上昇し、労働契約法が制定されるなど、中国、特に沿海地域において、事業コストが上がる中で、日本企業による中国外への移転、内陸部への移転の進展に関心を持って、調査を進めてきた。

二年が過ぎた時点での、現時点でのとりあえずの印象は、多数の日本企業にとっては、中国

沿海部において、コストの上昇はあるものの、沿海部での産業集積、インフラ状況などを考えると、沿海部から内陸部への移転、あるいは、ベトナムなどへの移転のメリットは限定的。このところ、経済情勢の悪化により、一部事業の再編成もあるが、それもこれまでのところ必ずしも順調には進んでいない。

ただ、沿海部中心の投資のトレンドが変わらないというのは、高付加価値の製造業に限った話であり、他の業種ではもう少し状況は多様。製造業でも、低付加価値な製品の生産という、海外への移動のスピードは早い。

また、原材料立地産業では、中国国内でも内陸地域での投資も多い。また、ソフトウェア会社の場合、求める人材さえいれば、投資先選定の柔軟性は高い。小売業、販売部門は、内陸部の需要拡大に対応し、内陸部により積極的に進出していく動きもある。

延辺朝鮮族自治州訪問

延辺朝鮮族自治州と言つと、北朝鮮と強く結びついた印象で、これまで投資環境を調査する

対象とはあまり考えていなかった。縁あって、亜細亜大学の延辺朝鮮族自治区の調査ミッションに参加することとなった。前述の中国での日本企業の大まかな印象から言つて、一部原料立地の日本企業などが存在するのだろうかと思いつながら、調査に参加した。

現地政府などの説明では、自治州内主要産業は、木材加工業、漢方薬製造業、食品加工業など。外国企業投資を見ると、九割以上は、韓国企業による投資。それ以外では、香港企業、日本企業、米国企業が存在し、更に極少数だが、北朝鮮企業も存在。外国企業による投資でも大多数が農林水産品関係の投資。

ただ、韓国企業の中には、農林水産品関係投資に比べるとIT分野での投資を行っている企業も散見された。今回訪問した日本企業は、IT企業と食品企業。食品企業は予想通りではあったが、IT企業が存在するとは思っていなかった。この点は少し予想外だった。

延辺投資のメリット

今回訪問した日本企業等から延辺に進出するメリットを聞くと、日本語レベルが高いし、全体的な教育水準も高い、日本に近接している、一部の原料が現地で調達しやすい、給料、土地などのコストが安い、といった点。更に個人的に印象が強かったのは、日本人が生活しやすいところという点。それぞれを簡単に評価すると、以下の通り。

(1) 日本語のレベルが高い

延吉では、朝鮮族においては、少し前までは、朝鮮語の勉強に引き続いて、外国語としては日本語を勉強する人間が多く、日本語のレベルは非常に高い。日本語学習者は、中国国内の大学入試でも有利であり、それも日本語を学習するインセンティブになっていた。延辺大学の研究者を見て、三〇〜四〇歳以上の研究者を見て、かなり日本語が出来るとの説明。

残念ながら、一〇年ぐらい前から、中国内で仕事を得るにはやはり普通語を勉強しないといけないということ、多くの親が普通語学習に相当に力を入れはじめ、外国語としては、英語を勉強する人間が増えてきており、高いレベルにあった日本語のレベルも多少下がっているとは言え、全国平均から言えばまだまだ高い水準。日本語を勉強しても、なかなか仕事につながらないことが日本語学習者の減少を招いており、一定の日本企業の進出により、これに歯止めがかかることが期待されている。

(2) 日本から近接している
延辺が日本から近いという話だが、確かに、日本からの直線距離は短い、日本から飛行機で来ても、直行便がなく、思ったよりも時間がかかる。船便だが、延辺朝鮮族自治州からロシア側を通じての日本への輸送に、ザルビノ経由の航路が、何回かの実験も進み、定期的に運航されているのは、状況の改善。大連を経由した輸送ルートに比べると、相当の時間短縮に。ただ、ザルビノ港から新潟港へのルートを使うと、新潟から日本国内各地への長距離輸送

が必要となるし、コスト面でも、まだまだ、大連ルートに比べて相当高い。

北朝鮮ルートだが、これは、羅津港を経由したルート。北朝鮮国境を越えて、羅津港まで相当のたがた道を行くし、港湾関係の料金も高いなど、経済的なイメージビリティはまだもう一步。また、港を出てからの輸送に海外企業(韓国、中国)を利用しようと思っても、港側が荷物の輸送の面で、海外籍の船よりも北朝鮮の船を優先するし、海外籍の船だと港湾利用料も相当に高く、結局、基本的には北朝鮮の船を使わざるをえなくなり、信頼性、コストとも低レベルということになってしまふようだ。ということ、日本からはまだまだ遠い存在だが、一旦動き出せば、将来性への期待は大きいかもしれない。

(3) 給料・土地が安い、原料調達容易
給料や土地などのコストが安いのは、企業にとってメリットは大きい。コストが低廉ということに加え、他の観点から見ても利点があるということである。投資先としての有望性が高まる。また、原料調達の容易性だが、自治州政府の説明でも、州域内の八割を森林が占めており、野生動植物、薬用植物、鉱物資源も豊富。特定の食品産業、医薬品産業には、魅力的な投資先ということが言える。

(4) 日本人として比較的住みやすい環境
中国にしては落ち着いた雰囲気であり、北朝鮮国境に近いことによる緊張感が強いわけでもない。韓国料理が多く、油の少なくなじみやす

い料理も多く、日本人として住みやすく、働きやすい印象。進出日本企業の進出経緯を聞くと、もともと延辺出身者が当該日本企業で働いており、その縁で、その会社の方が当地を数度訪問される中で、投資を決定という話を複数聞いた。実際に言ってみると良さがわかるので、多少とも当地を投資先として考慮されるなら、とりあえず、一度訪問することを薦めたい。

最後に

(投資先としての評価と今後への期待)

全体として見ると、日本の多数の企業が重視する、関連産業の集積という面では、魅力は薄いし、日本企業が内需狙いで来るのも早すぎる感じ。ただ、日本語人材が比較的多く、日本との距離が近づきつつあるし、自然資源が豊富であり、日本人として働きやすい環境も備えており、投資先としての魅力は大いにある。

当面は、日本語人材の活用による、小規模なソフトウェア投資、食品・林産業などの原料立地などの比較的限定的なセクターでの更なる投資が期待される。今後、日本との距離が実際に更に近づいた際には、大きく化ける可能性が高い。その際には、日本人として比較的働きやすい環境というものが、大きくプラスに効いてくると思われる。個人的にも、この地域が、今後、どのように大化けしていくか、定期的にウォッチをしていきたいと考えている。

(たかぎせいじ・日本機械輸出組合香港事務所 長)

延辺自治州雑記

須賀 努

八月十六、二十三日まで亜細亜大学アジア研究所の調査団に同行し、吉林省延辺朝鮮族自治州を訪問した。先ずは北京駐在の人間に、このような機会を与えて頂いたことを深く感謝したい。これまで数多くの中国国内調査、出張を繰り返してきているが、今回のような多彩な顔ぶれ(大学、行政、企業、マスコミ)、実に奥の深い質問、熱気溢れる調査を見たことがない。

特に中国駐在組のミッションではあり得ない朝鮮専門家である野副団長、鈴置日経編集委員、真田愛知淑徳大学教授から発せられる朝鮮語とその鋭い質問内容。そこに我々北京語組が、中国国内事情に照らして補足をするという構図は実に新しい調査の仕方ではなかったろうか。一般のミッションでは到底得ることの出来ない貴重な情報を数々収集できたのは嬉しい限りである。

さて、その調査地である延辺朝鮮族自治州であるが、我々中国に住む日本人にとっては、極めて遠い所との意識があつたが、実際訪れてみると北京から飛行機で僅か二時間。夏休みの行

楽シーズンとあって、航空券の手配が大変なほど賑わっていた。一方朝鮮研究家の方々からは『北朝鮮に一番近い場所』との位置付けと聞き、見る位置が変われば変わるものだと感心した。

延辺の中心地、延吉の街を歩いていて驚いたことは、意外なほどデパートや市場が多いこと。覗いて見ると、有名ブランドから、北朝鮮・ロシアの海産物、日本や韓国の製品が溢れていた。地元の人が『南の深圳 北の延吉』と呼ばれるほど消費が盛んだ、と胸を張っていた。中にはビックリ。工業の未発達なこの地で如何なるカラクリかと思えば、海外出稼ぎ者の送金が多いのだとか。

そもそも朝鮮族自治州という名前であるから、朝鮮族が多く住む地域(現在は人口の37%)。中国の朝鮮族は少数民族の中でも最も教育水準が高く、また歴史的な背景もあり中学から日本語を勉強するなど、日本語能力の高い人材を多数輩出している。しかし残念なことにそれらの人材に十分な職場が提供できず、地理的な

繋がりに韓国や日本に働きに行く人が多いようだ。この外貨送金が馬鹿にならない額と云うことだ。

今回訪問した延辺大学では、『日本語学科の志望者が減っている。日系企業は日本語人材をもっと雇用して欲しい。』との声を聞いた。この地に進出している日系企業は数十社、それも比較的小規模。実際現場へ行くと、『ワーカーは漢族、中間管理職は朝鮮族』といった体制が多かった。朝鮮族は向上心が強く、ワーカーでは満足できない、との声を聞き、海外流出の意味を知った。

中国には多くの少数民族が存在するが、漢族の上に立つて働いているケースをあまり見ることがない。中央政府も東北振興政策及び西部大開発の一環としてこの地を重視し、鉄道・道路の整備を急ピッチで進めているのだが、単純な経済活性化だけが目的ではあるまい。ロシア、北朝鮮と国境を接する微妙な位置にある上に朝鮮族が暮らす複雑さが見え隠れしていた。

その北朝鮮であるが、この地に長く住み北との仕事もしてきたと言う日本人から生の声を聞くことが出来たことは収穫であった。『北の利権構造は複雑。政府と党、軍と保衛(秘密警察)が利権を分け合っており、商売は簡単ではない。この構造によりトップに万一のことがあつても簡単には崩壊しないのでは。』『人民にはまだ余裕があり、大規模暴動の気配はない』。聞いている内に、何だか二〇数年前の中



延吉の中国系銀行の広告（韓国向け送金10分で届きます）

国を思い出していた。ああ、北朝鮮とは時間の止まった昔の中国なのだ、との認識を強くした。

しかし不思議なのは中国の態度。中国でも昔は外資が進出する際役所をたらい回しされ、地方政府の都合の良いように扱われ、不当な費用徴収なども横行し、進出の弊害であった（一部は現在でも残っている）。その中国が北朝鮮で港湾や鉱山の権益を確保したものの、実際には資金を取られるばかりで、事業は進んでいないとの話を聞き、正直首を傾げた。二〇年前の中国と同じ事をしようしている国に対して、そんなに無防備に資金を供出するものであろうか？

深読みし過ぎかもしれないが、この件を見る限り中国は将来北朝鮮を丸呑みしようとしているとも推測できる。

今回の視察のポイントとして北朝鮮、ロシアと国境を接している吉林省延辺朝鮮族自治州が労働契約法、企業所得税法改正、輸出税還付率の低下などで限界が見えてきている沿岸地域の受け皿として機能するのか、というものがあった。労働力という点でコストは比較的安く、日系企業にとっては言語も入り易い。州政府の強力な支援もあり、土地の確保も容易、琿春には日本工業園も計画されている。

反面物流は琿春、ザルビノ（ロシア）、ソクチョ（韓国）、新潟と言う航路が開設されているが、四力国に跨る事もあり、不安定要素を残している。現時点では陸路で大連まで運び、そこから海路を取る為、輸出には限界がある。

日系企業には少しハードルの高い場所であるが、韓国系はかなり進出していた。延吉の中国系銀行では『韓国ウォン送金、十分で届きます』と言った広告を大々的に出していたが、そのニーズは高いのであろう。

また中国系は内陸部と同様、正に安価な労働力と税金メリットを求めて進出してきた。中国系企業にとっては税の優遇は国からのプレゼント、原材料などの調達容易であれば直ぐに進出してくる。しかしメリットが薄ければ直ぐに他の場所を探す。地元としては出来れば長



図們大橋（中朝国境線）

期安定的に物事を考える日系企業の進出が望まれるのであろう。

視察のクライマックスとして、琿春郊外防川のゴールドントライアングル（中国、北朝鮮、ロシアの三国国境）を訪れた。展望台から見渡す左のロシア、右の北朝鮮領にはいずれも建物一つなく、極めて平穏な風景であった。この三国の政治的な安定、政策上の透明性が確保された時、この地はその価値を發揮するものと思われるが、今はまだ中国の一边境都市の位置付けから脱することは出来ない。

（すがつとむ・三菱UFJ信託銀行北京代表処）

朝鮮語と日本語の比較について

李 春 蘭

1、発音

二〇〇九年八月十六日から一週間、「北東アジアの社会・経済変容と適応」をテーマとする亜細亜大学アジア研究所調査団の諸先生と一緒に延吉と琿春の調査に参加する機会に恵まれた。外国の先生方とこのような調査を共にできて、学ぶことが非常に多かった。

今回の活動では、通訳を担当させていただいたが、調査団の先生の中には中国語や韓国語に堪能な先生方が多く、また、延辺の州政府関係者や延辺工業団地の関係者の中にも日本語を達者に話される人もいて、双方の語学能力の高いことに少なからず驚かされた。

延辺は、日本語を上手に話す人が多いが、それはこの地区では中学校から外国語として日本語課程があるからである。延辺は朝鮮族が多く、朝鮮語の発音や文法が日本語とよく似ていることも、日本語の能力の向上により影響を与えている。

私は延辺の地元出身で、現在、吉林師範大学で韓国語を教えているので、本稿では、今回の調査を通じて特に感じた朝鮮語と日本語の比較を中心にまとめ、読者のご参考に供したいと思う。

朝鮮文字は一四四四年一月に制定され、『訓民正音』と呼ばれている。制定された当初は二十八個の表音文字で、十七個の子音と十一個の母音で構成されていたが、その後、増加して現在は四〇個の表音文字で、子音は十九個、母音は二十一個となった。

朝鮮語の発音は豊かで、中国語と日本語の何れの発音も直接朝鮮語の発音で発音することができる。日本語の五十音はもちろん拗音、濁音、半濁音も朝鮮語で発音ができる。そのため、朝鮮族の日本語発音はきれいだといわれている。

2、語彙

朝鮮語の語彙造語には固有の語彙、漢字語、外来語がある。中国漢民族の先進文化の伝入によって、朝鮮語と日本語は中国語の漢字の影響を大きく受けた。両国言語は、大量の漢字単語を吸収し、応用使用している。近代に入って、朝鮮語の漢字詞の中には日本語から吸収したものもある。特に一九一〇年以降、日本語の新しい漢字詞が朝鮮語に混入し、朝鮮語の中で広く使われてきた。それ故、ある漢字詞は朝鮮語と日本語で共通的に通用されているが、中国語にはないという現象も出現している。

例えば、英語の *watch* は、日本語と朝鮮語の漢字詞では「時計」(시계)であるが、中国語では「表」である。英語の *car* は、日本語と朝鮮語の漢字詞では「汽車」(기차)であるが、中国語では「火車」である。このような単語は非常に多い。

3、言語分類 粘着語(膠着語)

言語の形態特徴からみると朝鮮語は日本語と同じように粘着語(膠着語)に分類される。粘着語とは実際に意味がある単語(即ち自立語、例えば動詞、名詞、形容詞等)の両側に、実際には意味のない単語(即ち付属語、例えば助詞、助動詞)を結び合わせて、これらの間の関係によって言葉の意味を表すのである。

例1

소매치기한테 돈을 도둑맞으면 즉시 경찰에 신고하세요. (朝鮮語)

泥棒にお金を取られたら、すぐ警察に届けなさい。(日本語)

如果你的钱被小偷偷了, 请马上向警察报案。(中国語)

例1のように、付属語は、独立語のセンテンスの中での地位と文法機能及びセンテンスの構成と意義に対してきわめて重要な働きを持っている。

例1を見ると、朝鮮語の「한테」と日本語の「に」、「을」と「を」、「으면」と「たら」、「에」と「に」は対応し、同じな役割を果たしている。この以外にも、「です」と「입니다」、「ます」と「합니다」等対応しているのが多い。つまり、朝鮮語のセンテンスの構成は日本語と同じであり、中国語とは全然違うことがある。

4、語順

朝鮮語と日本語の語順は同一である。語順が自由になるのは朝鮮語の特徴の一つである。朝鮮語の語順は主語が前に、述語は後に来る。目的語、補語などは作用している動詞の前になる。連体修飾語は修飾している体言の前、連用修飾語は普通は直接或は間接的修飾される用言の前になる。時間、地点、条件の連用修飾語は一般にセンテンスの一番前に置く。もし、一緒に存在する場合は、普通、時間連用修飾語が前、その次は地点、後条件連用修飾語である。

例2

主	나	그	일을	이미	알고	있다.	(朝鮮語)
	連体修	目的語	連用修	述語			
主	私は	あの	ことを	もう	知	っている。	(日本語)
	連体修	目的語	連用修	述語			
主	我	已经	知道了	那	件	事。	(中国語)
	連用修	述語	連体修	目的語			

5、「階称」と「敬語」

中国語は目上の人や後輩に対して言い方が同じだが、朝鮮語には「階称」がある。朝鮮語の階称には尊敬階、对等階、基本階三つがある。例えば、単語「배우다」(学ぶ)の尊敬階は「배웁니다/배워요」、对等階は「배우오/배우네」、基本階は「배워/배운다」である。

年輩の人や身分によっては尊敬階を、友達の間や目上の人や後輩に親切に言う場合は对等階を、友達の間や目上の人や後輩や子供には基本階を使う。目上の人に対して基本階や对等階を使ったら失礼になるから、相手の年齢や身分などの推測が難しい場合は全部尊敬階を使うと問題がない。これも、日本語と似ている。このように言い方は中国語にはない。

6、「語態」

朝鮮語の動詞はセンテンスの中で四つの語態がある。主動態、使動態、被動態、中動態である。この中で、使動態は日本語の使役態と、被動態は日本語の受身態と似ている。

朝鮮語は使役態の場合は、語幹後に接尾語「이/히/리/기/우(이우/구/추等)」を結んだり、動詞の語幹に接尾語「게」或は「도록」を加えて、その後に「하다」等を結んだり、「動詞+하다」の形で形成された動詞は、「하다」を「시키다」に変えたりして使役態に変える。ま

た、受身態の場合は、動詞の語幹に「리/기/히/이우」等の接尾語を加えたり、「名詞+하다」形の動詞は、「하다」を「되다」或は「당하다」、「받다」に変えて受身態に変える。例えば、「놀라다」(驚く)の使役態は「놀래우다」(驚かす)で、「존경하다」(尊敬する)の被動態は「존경받다」(尊敬される)である。これも日本語と似ていると思う。

中国語には動詞の変化はなく、「让」、「被」などだけを使って使役態と受身態を表す。

このように、朝鮮語と日本語との共通点が多くなり、要するに、朝鮮語と日本語は基本的に似ているから、朝鮮族は日本語使用が優利だということである。外国の投資を吸収して、元の経済を発展させようとする場合、外国と直接的に交流できることは大変重要だ。朝鮮族は韓国と北朝鮮と同じ民族として、言語が通じているから、現在、延辺に進出している外国企業の大部分は韓国系企業である。このように言語的に言えば、延辺は日本語を上手に使用する人材も多いので、今後は日系企業が多くなることが、期待されるのである。

以上述べたように、延辺は言語と経済地理的条件を中心に考えても、日本との交流には色々有利であり、今後、経済上でも必ず発展があると信じている。何より、延辺は私の故郷だから、そうなって欲しいと心から希望している。

(りしゅんらん・吉林師範大学東亜研究所)

東アジア共同体と米国

ブッシュ政権は東南アジアを軽視していた。ブッシュ大統領は、ASEANとのサミットを延期し、ライス国務長官はASEAN外相との会談を二度に亘りキャンセルした。米国のこうした行動はASEAN側をいたく失望させた。その結果は中国の東南アジア地域への影響力の強化という高い代償だった。

ASEANとの関係冷却を懸念していた米国の専門家が提言したのは、ASEAN大使任命、東南アジア友好協力条約の署名、米国防務長官がASEAN首脳会議だった。このうち、ASEAN大使はブッシュ政権最後の年の二〇〇八年四月に任命された。二〇〇七年十一月に採択されたASEANの憲法であるASEAN憲章では、ASEAN大使の任命が規定されており、米国はASEAN大使を任命した最初の国となった。

アジアの窓



東南アジア友好協力条約には、二〇〇九年七月にクリントン国務長官がASEAN外相会議に出席し署名を行った。そして、今年十一月に初の米国ASEAN首脳会議が、オバマ大統領が出席しシンガポールで開催された。こ

れにより三つの提言が全て実現したことになる。米国のASEAN政策がオバマ政権下で前政権の軽視から重視に変わったことが明らかになった。

東南アジア友好協力条約に参加したことにより、米国は東アジアサミットへの参加が可能となった。東アジアサミットの参加資格は、東南アジア友好協力条約に署名、ASEANの対話国、ASEANと実質的な協力関係を有する、の三つであり、米国は東南アジア友好協力条約署名によりその全ての資格を満たすことになったためである。東アジア共同体の議論は、ASEANプラス日中韓首脳会議と東アジアサミットで行うことになっている。米国が東アジアサミットに参加するかは不明だが、参加すれば東アジア共同体に関与し、あるいはメンバーになる可能性が出てきたといえよう。

米国は東アジアに位置する国ではないが、東アジアのステーク・ホルダー（利害関係者）であることは間違いない。米国は東アジア諸国の主要な輸出先であり、多くの米国企業が東アジアに進出している。東アジアの安全保障は米国抜きでは考えられない。東アジア包括的経済連携構想では、東アジアに位置しないインド、豪州、ニュージーランドがメンバーとなっている。そう考えると米国が東アジア共同体に参加することは不自然ではない。東アジア共同体という呼称が相応しくないのであれば、アジア太平洋共同体とすれば、豪州、インド、ニュージーランドに加え、米国の参加も無理がないであろう。（石川幸一・アジア研究所教授）

アジア研究所だより

二〇〇九年は読者の皆様にお世話になりました。二〇一〇年も引き続きアジア研究所へのご支援をお願いいたします。

所報今季号は趣を変えて「延辺特集」としました。アジア研究所と延辺大学日本研究所との学術交流協定締結を記念してのものであり、野副所長を団長とするミッションが延辺を訪問しました。その成果は各論文に詳しく報告されています。

セミナー「アジア・ウオッチャー」の開催について

次のとおり、十二月十二日にセミナー「アジア・ウオッチャー」を開催しました。日本でも重要な問題であり、多くの受講者がありました。

講師 大泉啓一郎（株）日本総研 調査部

主任研究員）

演題 「アジアの少子高齢化」

研究プロジェクト 研究会開催状況

研究プロジェクト「東南アジアのグローバル化とリージョナル化とその影響」2

十月十七日 発表者 畢 世鴻（アジア経済

研究所客員研究員）

テーマ「中国とGMS開発」

十二月五日 発表者 平川 均（名古屋大学

大学院教授）

テーマ「UNESCOからBRICSへの構

造転換と地域協力」